歴史的英知を踏まえて

別府史談会　会長　後藤重巳

本年の干支「庚寅」を一還暦遡ると昭和二十五年度の庚寅である。この年は、朝鮮戦争の勃発（六月）・総評の結成（七月）・警察予備隊の発足（八月）などが主要な歴史的出来事になろうか。朝鮮戦争は国連軍の兵站基地としてのわが国に、その特需で急速な経済発展を齎した。しかしそれはとうてい是認し難い歴史の悪戯であった。私たちの別府では、この年六月、市民投票によって「国際観光温泉文化都市建設法案」が成立、翌月公布された。別府市美術館が中央公民館三階に開館したのはこの年の秋であり、国際観光道路の工事（観光港～堀田）着工は翌年の二月のことで、何れも新しい時代への志向が息吹はじめた時期であった。

これより前、昭和十年、別府市に亀川・朝日・石垣の三町村が合併し、「大別府市」と呼ばれる気慨が醸成され、十二年、国際温泉観光大博覧会が開かれた。翌年三月、別府の都市計画で「別府都市計画風致地区」が指定された。この頃、別府では、四周の自然をまるっきり取り込んで「大別府自然公園計画」が生まれ、十五年、いわゆる「御大典記念」として、全国的に「観光報国運動」が展開され、別府市でも観光普及思想日・郷土愛護日・史跡顕彰日が定められ、三分野においてそれぞれ行事が華々しく計画された。京都大学（旧帝大）の関口鋏太郎博士を招いて「西日本観光ルート　―大別府公園計画―」と題する踏査と講演会が開催されたのもこの年であったらしい。戦争突入でそれを更に加速する余裕はなかったが、戦後の和平とともに、別府の国際観光都市化の問題が改めて大きく浮上したのであった。しかしこの後の六十年間、これら志向の到達点は、如何であったか。真摯に反省させられる問題が少なくない。

社会的・時代的背景はあったであろうが、このように何時の時代にも、掛け声倒れに終始しそうな別府の発展策から脱皮するために、私たちの別府史談会と『別府史談』は、歴史的な英知を踏まえて及ぶ限りの貢献をしたいものである。

平成二十二年三月